

26 製本おそるべし

—『神経学雑誌』のばあい

岡田¹⁾ 靖雄・小峯²⁾ 和茂

医学史に関する資料の保存については、日本医史学会で寺畑喜朔氏を中心に論じられてき、岡田も二、三の機会に発言してきた。

さきにも述べたことであるが、現在の日本精神神経学会の前身・日本神経学会の機関誌『神経学雑誌』の創刊の日がわからない。製本されたその第一巻をいくつかの所で見、第一巻を所蔵している人に問い合わせもしたが、やはりわからない。ところが、小峰研究所に製本されていないものが所蔵されているのによって、明治三五年四月一日とわかった。

一九〇二年に発足した日本精神神経学会（一九三五年、日本神経学会から改称）は今年創立一〇〇周年をむかえる。その記念誌編集のために、小峰研究所に製本されず

にほぼ全冊がそろっている。『神経学雑誌』（一九三五年からは『精神神経学雑誌』）を全部点検する機会をえた。

いままでみてきた、製本されたものは、本文をのぞき、表紙および広告部分を全部はずしていた。初期には発行年月日は表紙の右肩に印刷されていたので、製本されたものでは発行年月日がわからなかったわけである。そのほかにも、製本にあたりはずされた部分に、会務に関する、きわめて重要な情報ののっていたことがわかった。

第一は、編集人、発行人、事務所所在地である。とくに、事務所は東京府巢鴨病院内の東京帝国大学医科大学精神病学教室内にあつたが、それが他にうつつていた時期があり、それは発行人（内科系）の住所であつた。

第二に、総会議事や会の規則、役員名も会告として、本文外の広告欄ののっているものがあつた。

第三に、役員が投票によりえらばれていたことが確認できた。投票用紙ものこっていて、主幹、評議員などが在京会員中から選挙されていた（実は、日本精神神経学会は一九五四年に、評議員選出を投票制にするために、長時間の総会をしている）。同時に、東京外各地から協賛委員を

委嘱していて、

第四は、ドイツ語文神経学年報“Neurologia”が発行されたことである。製本されたものを順次くつていくと、欠号があり、その箇所がいくつかの図書館のもので一致していた。製本中に偶然のこされていた広告部分から、それがドイツ語文神経学年報に相当すると推定できた。雑誌所蔵目録から、東京大学医学図書館にその一冊のあることがわかったが、あたらしい目録からはきえていて、現物もなかった。ところが、小峰研究所所蔵のものから、一九〇九年、一九一一年、一九一二年、一九一三年に、別料金の臨時増刊として四冊でていたことを確認できた。その内容は、『神経学雑誌』にのった主要論文いくつかのドイツ語訳と、論文抄録とであった。

そのほかには、創刊号がうりきれて再版にかかっていること、のちの東京精神病学会に発展する精神病科談話会の発起人に呉秀三の名がはいっていないこともわかった（その後の談話会運営は呉を中心におこなわれるのだが）。

『神経学雑誌』の欧文題名は、“Neurologia, ein Cen-

tralblatt für Neurologie, Psychiatrie, Psychologie und verwandte Wissenschaften”であったが、第一次大戦後一九二〇年六月の第一九巻第六号から欧文題名は“Neurologia, a Japanese Journal of Neurology, Psychiatry and Psychology”となり、一九二七年八月発行の第二八巻第一号から、“Neurologia, eine Monatschrift für Neurologie, Psychiatrie und Psychologie”となった。これらの変更には、ドイツへの評価と編集者の交代とが影響しているのだろう。『精神神経学雑誌』となつてからの欧文は“Psychiatria, et Neurologia japonica”である。

こういった情報が製本によりうしなわれていた。くりかえすが、製本おそるべし。

(精神科医療史研究会・東京、小峰研究所²⁾)